

『旧約聖書』に見られるワインとビール

長谷川 修一

Wine and Beer in the Hebrew Bible

Shuichi HASEGAWA

『旧約聖書』に登場する人物たちはワインやビールを飲んでいただろうか。世界で初めてワインを飲んだのは誰か。飲んでいたとすればそれらはどんな飲み物で、いつどのように飲まれていたのだろうか。『旧約聖書』はワインやビールといったアルコール飲料をどのように捉えているのだろうか。『旧約聖書』の本文と発掘調査に基づく知見から、『旧約聖書』の主要な舞台となった古代の南レヴァントにおけるワインとビールに焦点を合わせて論じる。

キーワード：ワイン、ビール、『旧約聖書』、酒、アルコール

This article deals with wine and beer in the Southern Levant, where the main events described in the Hebrew Bible took place, through analysis of this text and the knowledge obtained from archaeological excavations.

Key-words: wine, beer, Hebrew Bible, drink, alcohol

ノアとワイン

『旧約聖書』中の「創世記」が描く物語の一つにノアの洪水物語がある。悪に満ちた全地に神が洪水をもたらし、義人ノアとその家族、そして一つがいつの動物だけが洪水を生き残って、のちの人類・動物それぞれの祖先となった、という話である。『旧約聖書』中の物語としては知名度抜群の物語であろう。

一方、洪水後のノアについては、それほど知られていない。「創世記」は「洪水物語」に続く部分において、人類で初めてブドウを栽培した人物としてノアを描いている。それだけではない。ノアはまた、史上初めてワインを醸造した人物としても描かれているのである。最初の人間アダムは「大地に仕える」という役割を神から与えられた¹⁾。「大地に仕える」とは、大地と人間との密接な関係のうえで成り立つ農耕を指す。食糧獲得こそが人間生活の基礎的な営みであることを、「創世記」を著した人々はよく知っていた。『旧約聖書』が古代における知的活動の生産物であることを考慮すると、この点は興味深い。西アジアにおいて都市文明が興隆し、食糧生産が盛んになり、十分な余剰生産物が蓄積される状態になると、農耕に直接携わる必要のない人間の割合が社会において増えていったはずである。当時の社会構造に照らせば、かくも高尚な文学作品を書き記した人々が、日々農耕に従事していた農民であった

とは考えがたい。しかしそこには、人間の基本的な生き方が大地に仕えることであるという、都市文明に対する、いわば批判的なメッセージが込められているのである。

さて、アダムも、その息子のカインも、農耕には携わったが、ブドウ栽培をしたとは書かれていない。洪水を人類史上の大事件として記録する「創世記」筆者の目には、農耕こそが人間生活の基礎であり、最初の人間が神から与えられた仕事である、と映ったようである。一方、洪水を生き残った人物が、洪水後に初めてブドウを栽培し、ワインを醸造してそれを飲んだことは、当時の社会において人々とワインが密接な関係を持っていたことを如実に物語っている。ノアはアダムから数えて十代目の子孫に当たる。人類史の初期から、人はブドウを栽培し、ワインを飲んでいた、『旧約聖書』はそう語っているのである。ノアが「義人」と描かれていることをも考え合わせるならば、さらに興味深い。ブドウの栽培やワインの醸造は、決して非なる行為などとは捉えられていないのである。罪を犯したアダムやカインが農耕をしていたこととは対照的ともいえよう。

今日、世界で最初にワインがつくられたのはジョージア・アルメニアあたりだと考えられている²⁾。その主要な理由の一つは、この地方が野生のブドウの原産地であるとされていることにある。また実際にワインを醸造していたと考えられる考古学的証拠も幾つか見つっている。2011

年には、アルメニアのアレニ (Areni) 1 洞窟から、6000 年前にさかのぼるワイン醸造施設の遺構が見つかった (Barnard et al. 2011)。洪水後に水が引いて、ノアの方舟が止まったとされるのは「アララトの山々」とされる。これは標高 5,000 メートルを超えるアルメニアの高峰である。最初のブドウ栽培者を洪水後のノアとする「創世記」の記述も、決して的外れなものではなく、この地方で古くからブドウが栽培され、またワインが醸造されていた古代人の記憶を反映しているのかもしれない。

古代諸語で「ワイン」を表す言葉もワインの起源にかんして示唆的である。日本語には「葡萄酒」という言葉もあるが、今日では「ワイン」という呼び名が一般に定着している。これはおそらく英語から入ったのだろう。同様に韓国でもワインと言う。ヨーロッパの諸言語を見てみると、英語では wine、ドイツ語では Wein、そしてイタリア語では vino、フランス語では vin、スペイン語でも vino である。v と w は言語によって発音が異なるので、もとをたどれば同じ言葉に行きつくであろう。これらは現代も話されている言葉であるが、ではもっと古い言語ではどうだろうか。ラテン語では vinum、古典ギリシア語では oinos であり、これらも同様に同じ言葉から来たといえるだろう。さらに古い時代にアナトリアで話されていたヒッタイト語では wiyana である。インド・ヨーロッパ語以外では、例えば『旧約聖書』が書かれたヘブライ語では yayin といい、やはり似たような発音の言葉である (アッカド語では karānum)。こうした事実から考えると、ワインという言葉は、ワイン伝播時にモノと一緒に伝わった言葉と考えることができる。すでにその起源がわからない「ワイン」という言葉は、古代のグルジア・アルメニア地域の人々が、ブドウの果汁が発酵してできた飲み物を飲んで名づけた名前に由来するのかもしれない。

『旧約聖書』中のワイン

次に、『旧約聖書』がワインをどのように扱っているのか概観してみよう。「ワイン」に当たる言葉は、『旧約聖書』中に 185 回言及される。その呼び名は 9 通りにも及ぶことから、古代の南レヴァントの人々とワインとの関係の深さがうかがえる (King and Stager 2001: 101)。メソポタミアやエジプトで最も一般的な飲み物はビールであったが、南レヴァント地域におけるそれはワインだったようである。これは当然ながら、同地域のブドウ栽培に適した気候と土壌による。ブドウはワインに使われる以外にも、干しブドウとして保存されることもあった。

実は「創世記」のノアは単にワインを醸造した最初の人間になっただけではない。「創世記」9 章 21 節は「あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になって

いた」と記述する。ノアこそ、人類史上初めて酩酊した人物であったと『旧約聖書』は伝えるのである。

同じ「創世記」の 19 章には、ロトとその二人の娘にまつわる物語が載せられている。ロトとは、古代イスラエル人の父祖とされるアブラハムの甥である。ソドムとゴモラという悪に満ちた二つの町が神によって滅ぼされた時、ソドムに住んでいたロトとその家族は町を脱出した。ロトの妻はこの時、神の言いつけに背いて後ろを振り返ったために塩の柱になったとされる。ソドムを後にしたロトは二人の娘たちと別の地域に移住したわけだが、そこには娘たちの結婚相手がいなかった。子供を授かることが神からの祝福であり、自分が死んだときに彼らから適切な埋葬を受けることが人生の一大事であった「社会」にあって、二人の娘は配偶者のいない状態を何らかの方法で解決せざるをえないと感じたようだ。二人は、実の父親であるロトにワインを飲ませて酩酊させ、これと代わる代わる交わることによって、子供を授かったのである。こうした近親相姦によって生まれた二人の娘の子がそれぞれ、後のイスラエル人のライバルとなるモアブ人とアンモン人の祖先となった、とあることから、こうした酩酊・近親相姦という行為は好ましく思われていなかったことが看取される。ここでもノアの描写におけると同様、ワインが人を酩酊させせる飲料として描かれている。

『旧約聖書』はまた、ワインを神への献げ物の一つに指定している。人がよろこんで飲み食いするものは、神もまたそれをよろこばれる、と考えたのだろう。擬人神観の表れである。収穫の感謝を神に献げるとき、大地からの豊かな恵みを現物として献げるという慣習は広く世界中で行われる行為である。日本人が古来、コメからつくられた日本酒を献げていたように、古代の南レヴァントにおいてはブドウの産物であるワインを神に献げていた。ともに身近な作物からつくるアルコールを神に献げていたのである。実際、「士師記」9 章 13 節には「神と人を喜ばせるわたしのぶどう酒」と擬人化されたブドウの木自身が語っている場面がある。

ワインを神に献げた背景にはワインの生成過程も関係していたのかもしれない。ブドウは、果皮自体に果汁を発酵させる天然の酵母が付着しているために、たとえ酵母を加えなくても簡単に発酵させ、ワインをつくることのできる。古代の人がワインを、まさに神から与えられた飲み物と捉えても何ら不思議はない。

それと同時に、『旧約聖書』は「あなたであれ、あなたの子らであれ、臨在の幕屋に入るときは、ぶどう酒や強い酒を飲むな。死を招かないためである。これは代々守るべき不変の定めである」(レビ記 10 章 9 節) と命じている。これは、「臨在の幕屋」と呼ばれる聖所に仕える祭司たち

が、ワインなどの酒を飲んで奉仕することを禁じたものである。今日のパイロットやキャビンアテンダントたちがフライトの12時間前から飲酒禁止になると似ているかもしれない。要は、酒に酔った状態で神への神聖な奉仕に与ることを戒めているわけである。ノアやロトのエピソード同様、酒には人を酔わせる効果があることを『旧約聖書』は認めている。

『旧約聖書』はワインが神からの祝福であることをもはっきりと示している。例えば、「申命記」7章13節には「主は、あなたに与えると先祖に誓われた土地で、あなたの身から生まれる子と、土地の実り、すなわち穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油など、それに牛の子や羊の子を祝福してください」という一文がある。神からの祝福のしとしての大地の産物のなかに、ワインが明記されているのである。同じ「申命記」14章26節には「銀で望みのもの、すなわち、牛、羊、ぶどう酒、濃い酒、その他何でも必要なものを買ひ、あなたの神、主の御前で家族と共に食べ、喜び祝いなさい」という神の命令が記載されている。これも、収穫時のよろこびの行事をワインと共に祝うように、という神からの命令である。祝宴とワインは切っても切り離せず、宮廷で催される王たちの宴にワインは必需品であった。貴金属でつくられた豪華な酒器も用いられたようである。

旅行にもワインは欠かせない飲み物であった。『旧約聖書』には、旅人の必携品にワインを入れる革袋があったことを記している。疲労回復に効果があると考えられていたようで、戦争に赴く戦士たちの必需品でもあった。

また、若者たちの愛を官能的に描く「雅歌」のなかでは「ぶどう酒にもましてあなたの愛は快く」（1章2節）、「ぶどう酒にもまさるあなたの愛をたたえます」（1章4節）、「ぶどう酒よりもあなたの愛は快い」（4章10節）など、愛がワインに譬えられている。これも、人を楽しませ、心地よくさせるワインの効能を知り尽くした人々ならではの表現といえよう。

このように、『旧約聖書』は当時の南レヴァントの人々とワインとの密接な関係について多くを記している。「詩編」104編15節は、「ぶどう酒は人の心を喜ばせ、油は顔を輝かせ／パンは人の心を支える」と記し、ワインの効能を的確に表している。同時に、それが時には酩酊をもたらすものとして警告している。それは例えば、紀元前8世紀の北イスラエルの預言者ホセアの「ぶどう酒と新しい酒は心を奪う」（「ホセア書」4章11節）という言葉に表れている。

発掘調査で明らかになる古代南レヴァントのワイン産業
『旧約聖書』の主要な舞台は「南レヴァント」地域であ

る。100年以上におよぶ同地域の発掘は、『旧約聖書』時代のワイン産業の実態についても、様々な情報をわれわれに提供してくれる³⁾。この地域のなかには、とりわけブドウの生産に適した気候や土壌の地方があり、そこでは古代からワインが盛んに生産されてきた。そうであればこそ、ワインが人々の生活と密接な関係を持ち、その結果『旧約聖書』にこれだけ多くワインが言及されているのである。

オリーブ油とともに税としても徴収されたと考えられるワインは、紀元前1千年紀に王国が成立すると、王の管轄下で国外へも輸出されたようである。近年の研究により、LMLK（「王のもの」）という印影が把手に押された大型甕の容量が画一的であることが判明した。これは行政によって、こうした商品が一元的に管理されていたことの証左と考えられている（Zapassky et al. 2009; Sergi et al. 2012）。

南レヴァント各地の遺跡からは、ブドウを足で踏んで果汁を絞ったと思われるブドウ搾り場や、ワインを保存したり飲んだりするのに使用したと思われる酒器等も多数出土しており、当時のワイン文化の一端を垣間見せてくれる（図1、2）。

2013年、南レヴァント最大の穀倉地帯であるイズレエル平野の東部で、鉄器時代Ⅱ期のワイン醸造施設が出土した（Franklin and Ebeling 2013）。この施設はこれまで発見されていた同時代の南レヴァントのワイン醸造施設の中でおそらく最大のもので、ブドウ搾り場と絞ったブドウ果汁を貯蔵しておく果汁タンクが、岩盤に彫り込まれている（図3）。自然の岩盤を利用したこのようなブドウ搾り場は、鉄器時代の南レヴァントに遍在するものである。

こうした大規模なブドウ搾り場には、収穫の季節になると周辺からブドウが運ばれた。そこで絞られた果汁を貯蔵壺に移して発酵させたのであろう。どれほどの地理的範囲

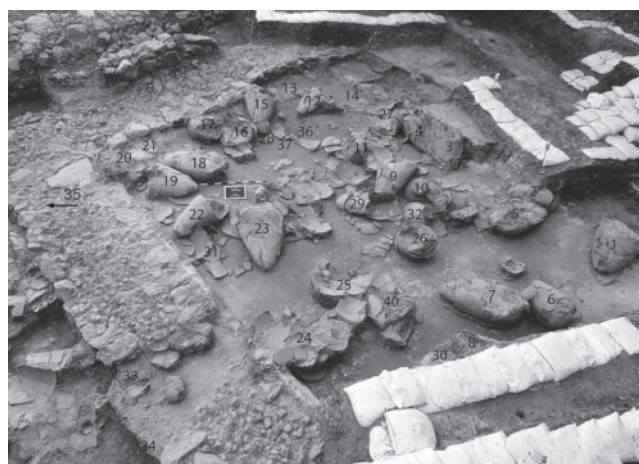


図1 イスラエル北部テル・カブリ（Tel Kabri）で見つかった紀元前1700年ごろの「ワイン・セラー」（©Wikimedia Commons）。40ものワイン貯蔵壺が発見された。



図2 テル・レヘシュ出土の土製「フィアレ (phiale)」(筆者撮影)。鉄器時代のアッシリアや周辺諸国の浮彫には、この型の器を用いてワインを飲む王侯の姿が描かれている。

からブドウが集められたかは推測の域を出ないが、果汁が失われない程度の新鮮さを保ちつつ輸送できる範囲内であったと思われる。

ブドウ果汁は発酵時にガスを発生させるため、発酵に使われる容器内の内圧が高まって容器自体が壊れかねない。ガス排出のための弁として、織物生産に使われる「ルーム・ウェイト (loom weight)」が壺の口に詰められ、その上から粘土で密封するケースもあったようである (Gal 1989; Gal and Alexandre 2000: 125-126)⁴⁾。その際にはルーム・ウェイトの中心に穿たれた孔が、発生したガスの排出に使用されたと思われる。

ガスが発生するため、発酵過程が終わるまで、輸送は現実的ではない。おそらく果汁は壺に入れられて醸造施設の近くに保管され、発酵後の製品が地方の集積センターに輸送されたり、センターを介さずに直接分配されたりしたのであろう。醸造施設そのものも一種の集積センターであったはずだが、さらにそれらを集積するような場所も、領域国家内であれば十分想定できよう。他方、ホルバット・ロシュ・ザイト (Horbat Rosh Zayit) など、鉄器時代Ⅱ期の小規模な砦においても発酵過程にあったと思われるワイン貯蔵壺が出土していることから (Gal and Alexandre 2000: 125-126)、ブドウ栽培が可能な地域においては、様々な場所で、おそらく自給用と思われる小規模なワイン生産が行われていたことも考えられる。

南レヴァントは古くからエジプトへワインを搬出していた地域である (Vouillamoz 2015: 535)。領域国家がワインの対外交易を一元管理できれば、主要な交易品のひとつとして利をあげることも可能であったと思われる。古代南レヴァントにおけるワインの交易やワインの集積・再分配については、さらなる研究の余地がある。ワイン貯蔵壺の胎



図3 イズレエル平野で出土した鉄器時代Ⅱ期のワイン醸造施設 (筆者撮影)。手前に絞ったブドウ果汁を貯蔵しておく果汁タンク、向う側にブドウ搾り場が見える。

土や壺内の残滓物の分析なども含め、今後の調査・研究の進展に期待したい。

聖書翻訳から姿を消すビール

次に、西アジアのもう一つの主要なアルコール飲料、ビールについて見てみよう。西アジアにおいて、ビールはるか古い時代から親しまれていたアルコール飲料であった。メソポタミアでは神々に献げるお神酒もビールであったことが知られている。

では、『旧約聖書』の中にビールは登場するだろうか。新共同訳や口語訳といった、今日広く出回っている『旧約聖書』の和訳には、「ビール」という単語は一度も登場しない。西アジアでこれほどまでにポピュラーだったビールを、聖書に登場する人物はまったく口にしなかったのだろうか。実は、『旧約聖書』のなかには、ビールを指している可能性が指摘される *šekhar* という言葉がおよそ20回使われている。メソポタミアで広く用いられていたアッカ

ド語という言語ではビールを *šikarum* という言葉で呼んでいた。アッカド語とヘブライ語は同じセム語に属する言葉である。また、『旧約聖書』中の *šekhar* も、明らかにアルコール飲料を指すと思われる文脈で用いられている。そこで *šekhar* も、それとよく似たアッカド語の *šikarum* 同様、ビールを指すと主張する研究者がいる (Borowski 1987: 92; Homan 2004a, 2004b)。

ところが、先ほどみたように、今日の『旧約聖書』の和訳では、*šekhar* という単語をビールとは訳していない。その代わりに使われているのは「強い酒」という言葉である。上述した「申命記」14章26節では「濃い酒」と訳されていた。これは日本語の『旧約聖書』に限ったことではない。英語の『旧約聖書』においても同様である。ではなぜ、ビールではなく、それに代わる訳語が用いられ続けているのだろうか。

その理由を探るには、ビールがヨーロッパにおいてたどった歴史を概観する必要がある。古代のギリシア人はビールをあまり好まず、もっぱらワインを飲んでいたのである。その理由として G. オリバー (Oliver) は、特にアレクサンドロスによる征服以降、ビールが、エジプト人やメソポタミアの人々といった敵、あるいは被征服民の飲み物として捉えられたことを挙げる (Oliver 2012: 438)。ギリシア人の後にこの地域を支配したローマ人もこのギリシアの伝統を引き継いだ、とオリバーは想定する⁵⁾。

他方、ローマ人の北方にいたゲルマン人たちは穀物に水を加えてつくった、エジプトのビールと似た飲み物を摂取していたことが、プリニウスの『博物誌』(第14巻29)やタキトゥスの『ゲルマニア』(第23章)などに記されている。やがて、これらゲルマン人たちがヨーロッパ社会の中心となっていった。フランク王国はゲルマン人の一派フランク族が興した国であったが、キリスト教を受容し、ローマの文化も取り込んでいく。こうして中世のヨーロッパが形成されていった。この時代から近代にいたるまで、ワインはキリスト教の聖餐式のなかで、キリストの血を象徴する重要なアルコール飲料として用いられ続け、また、ローマ以来の伝統のなかで高貴な飲み物と考えられていた。他方、中世ヨーロッパにおいて、こうした穀物酒は修道士たちが自家消費につくる飲み物となった。その後1100年代になると、ホップが使用され始め、今日のビールに近いものが誕生する (Oliver 2012: 438-439)。ビールの長期保存を可能にさせたホップのおかげで、ビールは商品として広く市場に出回るようになった。

ビールに対するネガティブなイメージが醸成されたのは、イギリスにおいてだったかもしれない。1066年に創設されたノルマン朝下、上流階級がワイン、大衆がビール、と飲料文化が社会階層ではっきりと分かれたという

(Oliver 2012: 439)。イギリスでは大陸ヨーロッパに比べブドウ生産が難しく、ワインの希少価値が必然的に高まったことと無関係ではないだろう。

こうしたイギリスの伝統の中、1611年に刊行されたジェームズ王欽定訳聖書では、*šekhar* がことごとく「強い酒」という言葉で訳されたのである。この聖書は、19世紀末まで英国国教会で用いられた唯一の英訳聖書であったことから、その翻訳が英語圏のキリスト教社会に与えた影響は計り知れない。さらに、16世紀以降ピューリタンが登場し、その一部が禁酒・節制運動を進めていくと、ギリシア・ローマ以来の伝統とも結びつき、ビールを大衆の飲み物として見下げる傾向が、とりわけ米英を中心とした社会に広く浸透するようになったと推測される。

こうした「西ヨーロッパ的な」風潮が現代の研究者の間に広がり、*šekhar* という単語の訳語にビールという言葉当てをためらわせたのだ、とホーマン (Homan) は主張する (Homan 2004a: 27-28; 2004b: 84, 86)。なぜなら、神自身が、*šekhar* を自分への献げ物にするよう命じているからである。こうして歴史をたどると、ビールという単語が『旧約聖書』翻訳において忌避されたという説明は、あながち的外れとは言えない。

ところが近年、*šekhar* はやはりビールを指すものではない、という見解も再び提出されている。その主張者の一人、L. E. ステイガー (Stager) は、*šekhar* がワイン醸造の副産物であるブドウの搾りかすを発酵させてつくったブランデー (グラッパ) であると唱えている (Stager 2011: 7-8; Pardee 2009)。『旧約聖書』中の「民数記」は、神に特別の誓願をささげた「ナジル人」の守るべき務めとして、ワインや *šekhar* の飲用を戒めているが、この戒めを定めた「民数記」6章2-4節では、すべてブドウの産物が列挙されているなかに *šekhar* も挙げられていることから、*šekhar* も同様にブドウの産物であったと考えている (Cross 2008: 341, n. 61)。*šekhar* をワインと並べて記している陶片もアッシュケロンで発見されていることから (Cross 2008: 341-342)、*šekhar* がビールではなく、ワイン同様ブドウの産物であったという可能性は高いと考えられる。しかし、発酵に加えて蒸留を必要とするグラッパを当時つくることができたかどうかについては、物的根拠はまったくなく、現在のところは上記の記述から導き出される推測の域を出ない。

仮に *šekhar* が指す飲料がビールではないとすれば、『旧約聖書』中に明確にビールを指す言葉はないことになる。だからと言って、古代の南レヴァントの人々はビールをまったく口にしなかったということにはもちろん得ない。メソポタミアやエジプトの文化と触れ合う中で、彼らもビールを口にすることは疑問の余地がない。そうであ

れば、古代ギリシア人同様、古代の南レヴァントの人々も「ワイン党」だったために、ビールについては『旧約聖書』に記さなかったのだろうか。

ここで忘れてはいけないことが二つある。一つはワインとビールの製造過程の違いである。古代におけるワイン製造には、たとえ酵母の追加が不要とは言え、ブドウの収穫から発酵・醸造に至るまでの過程において多くの手間がかかった。また、ブドウは年に一度の収穫時にしか新鮮なワインをつくれなかったのに対し、大麦を主原料としていたビールの製造はそれに比せば単純なものであったし、貯蔵の容易な穀物を原料とするため、一年中製造が可能であった。

もう一つの点は『旧約聖書』を記していた人々がどのような社会層に属していたか、という点である。上述したように、彼らは文字の読み書きができる社会のエリート層に属していた。人口比に対するブドウの生産量が少なく、製造に手間のかかるワインは、メソポタミアやエジプトにおいては高級品であった。実際、紀元前1千年紀のアッシリアや周辺諸国の浮彫の宴の場面で描かれるのは、王侯たちがワインを口にしている場面である。他方、南レヴァントにおいては、これらの地域ほど両者の価値差はなかったかもしれないが、『旧約聖書』を記した人々を含むエリート層が主なアルコール飲料として念頭に浮かべたのはやはりワインだったと思われる (Pardee 2009)。これらの点を考慮すると、たとえビールという単語が『旧約聖書』中に登場しなかったからといって、『旧約聖書』時代の南レヴァントの人々がビールをまったく口にしていなかった、と結論することはできない。例えば、ブドウが不作であったとき、あるいは、ワインが尽きてしまった季節など、人々が、とりわけエリート層には属さず、穀物生産に自ら携わっていた農民たちがビールを口にしていた可能性は否定できない。

まとめ

以上のように、ワインは『旧約聖書』を生み出した古代の南レヴァントの人々にとって重要な飲み物であった。一方ビールについては、古代の南レヴァントの人々にとって、どれだけ一般的であったかは現在のところ不明と言わざるを得ない。いずれにしても、水をそのまま飲料とすることが難しかった古代の同地域の人々にとって、これらのアルコール飲料は日常の必需飲料だったことについては疑う余地がない。

ワインはその後のキリスト教世界の聖餐式で不可欠とされたことから、キリスト教の伝播と共に世界に広がっていった側面もある。今日世界中で親しまれているワインの文化的背景を、『旧約聖書』抜きに語ることはできないで

あろう。

近年の考古学的研究によって、古代のワイン産業で重要な位置を占めた南レヴァント地域におけるワイン製造について、豊かな情報が得られるようになった。今後さらなる調査・研究によって、ワインの流通実態がより一層明らかになることが期待される。加えて、同様の研究が同地域のビール消費についても展開される必要があるだろう。また「ビール」という訳語が聖書翻訳上忌避された理由についてもさらなる詳細な研究が俟たれる。こうしたワイン・ビール研究の進展によって、人類が愛してやまぬこれらの飲み物の謎にさらに一歩迫れることであろう。そしてそれが、ワインとビールとの間の微妙な文化史的関係にも一光を投じるはずである。

註

- 1) 「大地に仕える」という訳については、月本 (1996: 73-76) に詳しい。
- 2) ワインの起源・歴史については、P. E. マクガヴァンの編著作 (McGovern *et al.* 1996; McGovern 2003) に詳しい。
- 3) 「古代イスラエル」のブドウ栽培については、『旧約聖書』における言及をも含め、C. E. ウォルシュ、M. ブロシ、A. ハダスの著作 (Walsh 2000; Broshi 2001; Hadas 2007) に詳しい。
- 4) Z. ガル (Gal) はこれを根拠に、一般にルーム・ウェイトと考えられている土製品を「ストッパー」であると主張しているが、現在のところ、この見解は広くは受け容れられていない。
- 5) ただし、ホーマンは、アイスキュロスやアリストテレスらの著作に見られるビールへの軽蔑を紹介している一方で、ストラボンの著作にはビールが大衆の飲み物であったこと、ディオドロスは大麦からエジプト人からつくる飲み物がワインに劣らぬ香りと甘さを持つと記していることも紹介している (Homan 2004b: 86)。

参考文献

- Barnard, H., A. N. Dooley, G. Areshian, B. Gasparian and K. F. Faull 2011
Chemical Evidence for Wine Production around 4000 BCE in the Late Chalcolithic Near Eastern Highlands. *Journal of Archaeological Science* 38: 977-984.
- Borowski, O. 1987 *Agriculture in Iron Age Israel*. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Broshi, M. 2001 Wine in Ancient Palestine: Introductory Notes. In: M. Broshi, *Bread, Wine, Walls and Scrolls*. Journal for the Study of the Pseudepigrapha Supplement Series 36, 144-172. London/New York, Sheffield Academic Press.
- Cross, F. M. 2008 Inscriptions in Phoenician and Other Scripts. In L. E. Stager, J. D. Schloen and D. M. Master (eds.), *Ashkelon 1: Introduction and Overview (1985-2006)*, 333-372. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Franklin, N. and J. Ebeling 2013 Preliminary Report of the 2013 Jezreel Expedition Field Season. (<http://www.bibleinterp.com/articles/2013/08/fra378012.shtml>. 2015年11月12日閲覧)
- Gal, Z. 1989 Loom Weights or Jar Stoppers? *Israel Exploration Journal* 38: 281-283.
- Gal, Z. and Y. Alexandre 2000 *Horbat Rosh Zayit: An Iron Age Storage Fort*

- and Village. IAA Reports 8. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Hadas, A. 2007 *Vine and Wine in the Archaeology of Ancient Israel*. Tel Aviv, Kronenberg Publishing.
- Homan, M. M. 2004a Beer, Barley, and שֵׁכָר in the Hebrew Bible. In R. E. Friedman and W. H. C. Propp (eds.), *Le David Maskil: A Birthday Tribute for David Noel Freedman*, 25-38. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Homan, M. M. 2004b Beer and Its Drinkers: An Ancient Near Eastern Love Story. *Near Eastern Archaeology* 67: 84-95.
- King, P. J. and L. E. Stager 2001 *Life in Biblical Israel*. Louisville/London, Westminster John Knox Press.
- McGovern, P. E. 2003 *Ancient Wine: The Search for the Origin of Viticulture*. Princeton/Oxford, Princeton University Press.
- McGovern, P. E., S. J. Fleming and S. H. Katz (eds.) 1996 *The Origin and Ancient History of Wine*. Food and Nutrition in History and Anthropology 11. Amsterdam, Gordon and Breach Publishers.
- Oliver, G. 2012 The History of Beer. In G. Oliver (ed.), *The Oxford Companion to Beer*, 435-441. Oxford, Oxford University Press.
- Pardee, D. 2009 Review: Le-David Maskil: A Birthday Tribute for David Noel Freedman. Edited by Richard Elliott Friedman and William H. C. Propp. *Biblical and Judaic Studies*, vol. 9. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2004. *Journal of Near Eastern Studies* 68: 55-56.
- Sergi, O., A. Karasik, Y. Gadot and O. Lipschits 2012 The Royal Judahite Storage Jar: A Computer-Generated Typology and Its Archaeological and Historical Implications. *Tel Aviv* 39: 64-92.
- Stager, L. E. 2011 Ashkelon on the Eve of Destruction in 604 B.C. In L. E. Stager, D. M. Master and J. D. Schloen (eds.), *Ashkelon 3: The Seventh Century B.C.*, 3-11. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Vouillamoz, J. 2015 Palaeoethnobotany and the Archaeology of Wine. In J. Robinson (ed.), *The Oxford Companion to Wine*, 533-535. Oxford, Oxford University Press.
- Walsh, C. E. 2000 *The Fruit of the Vine: Viticulture in Ancient Israel*. Harvard Semitic Museum Publications 60. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Zapassky, E., I. Finkelstein and I. Benenson 2009 Computing Abilities in Antiquity: The Royal Judahite Jars as a Case Study. *Journal of Archaeology Method and Theory* 16: 51-67.
- 月本昭男 1996 『リーフバイブル・コメンタリーシリーズ 創世記 注解 I』 日本キリスト教団出版局。

長谷川 修一

立教大学文学部

Shuichi HASEGAWA

College of Arts, Rikkyo University